



紅葉の 燃えいてキャンパス 秋高し

キャンパスの紅葉のピークは、11月6日の大学祭「姫山祭」の頃。写真はその1週間後。紅葉の主役はトウカエド。編集部では人文学部の管理棟3階からの紅葉シーンを予定していましたが、この夏の工事で樹木の上部は軒並みバツサリ。紅葉どころか丸坊主。代わりに中央図書館前広場の紅葉ショットをお伝えします。



第 30 号

発行・鴻文会

山口大学 文理学部文文学科・
人文学部・大学院人文科学
研究科 同窓会

(連絡事務所)

〒753-0831 山口市平井773-2

沖田ビル202

電話・FAX 083-928-4527

郵便振替口座 01500-4-15902

http://

homepage3.nifty.com/koubun/

メール: fycsf998@ybb.ne.jp

スタッフ二年目の弁

同窓は満天の星
この星明りこそ

同窓呼応への気脈互通を

副会長 北川 健



「もう本人は、どちら様にも電話口には出ないですヨ……」
先日、会務のため大先輩F氏に電話を献ずると、夫人から氏のご退隱のほどをそう告げられた。ショックであった。

F氏とは、あとにも先にもM教授退官記念会の折にお会いしたこと一度限りであるが、早くからお名前、ご活躍のほどは伝わっていた。

一年ほど前、本学の書店で氏の新著である入門書が目に入り、あわてて手にとると、学生時代の研究室での演習時間、同氏とF教授と後輩「Y君」との三人のサマが描かれている。

氏のこれまでの何度かの入門書には見られないエピソード記載である。私は即座にこれを購入し、授業の資料に組み込み、以来この一幕を学生に伝えてきている。

思えば、F先輩は私にとつての「きらめく星であったのだ。いな、F先輩だけでなく、いまや鬼籍に移った同輩、先輩を偲ぶと、その面影が光り輝いて浮かびあがってくる。そのかけがえのない輝きに、いまなお自分が浴びてきていることに気づかされる。

皆々、光を放つ星々。同窓は満天の星なのである。この星明りのなかに、自分もまた一抹の、またたきを覚える存在。

ちなみに、不肖私は、三年半前からおこがましくも「わが学窓在席五周年記念事業」と自唱して或る研究をオツ始めた。

ことの遠因は、五年前の学窓にある。その意味で、学窓は実に「わがアルカディアの丘」であったことになる。

これまで先行の学者諸賢は五氏だが、うち四氏は本学に教席を置かれた方々。これら恩師ほかを向うに回して「中原に馬を進める」とあつてはドギマギもどつたが、何らか学窓発表を経てみると、いまは肅々と先学踏破、自説確立を進め続けている。

この「わが五 年目の宿題」を介して、私は学窓と一つの「血脈」を得たという自覚と実感を抱くに及んだ。この「血脈」意識は、あたかも五 年前からこの学窓に自分が居続けているかのごとき錯覚さえ私にもたらしている。

そこで了知した。すなわち、かつての学窓と時間、空間の懸隔を越えて「背中合わせに」自己指定、自己連結できる、それがみずからとしての学窓の原体験化と熱源化であり、これぞ「在学同窓の極み」だと。

そうした誰しもの学窓の原体験化と熱源化の交流と交歓の相互保障こそ、同窓共同の任務の基底である。

さてさて、この一年、執行部の活動スタッフの一員となったが、見れば主力パワーは女性スタッフご一同。その個々の発する輝きが連環して、まるで宝石をつないだ光の輪のようにさえ思えることがある。内心ひそかにこれを「サテライト・スタッフ」と呼び、本会の誇るべきフーリスト・セクターだと位置づけている。

はばかりながら「同窓呼応への気脈互通」を私なりのテーマとしているが、その方路を彼女らから学ばせてもらっているようではない。

一方、この春から就農の身となった。季節の訪れと次なる作物への「酔い」が先導してくれている。さてさて、これまた夜露の宿りを満天の星が見てござる、の境地である。

(文理第八回卒・国史学)

鴻文会、この一年

会長 岡光 一 浩



同窓会の主な任務は、同窓生会員(卒業生、現・旧教員、現学生)間の親睦と、同窓生と大学・学部との連携に...

一年、なにをしたかと問われると、答えに窮してしまふ。一応、別掲の報告のとおりだが、そこには内心忸怩たるものがある。でも、ここで私が書かねばならないのはこの一年の活動状況だろから、まずそのことから書くことにしよう。

九月初旬の、会報「鴻文」の最初の編集会議が数名だが新しい役員の初めての顔見せだった。この会報の二ユースの中心が八月に行われた総会の紹介にあることに誰しも異論はなかったが、少々マンネリ化したコンテンツに斬新性を取り入れてインパクトのあるものにする...

作成されていることは皆さまご存じのとおり。会報は年に一度だが、HPはたびたび更新が行われ、鴻文会のホットなユースをご覧いただけると思う。ぜひ、これらの情報源によって鴻文会の動静をキャッチされ、会員間の親睦・連携を強めていただきたいものである。

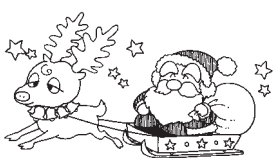
などの提案をした。それらの提案は協議のうえ、一部その後の三役での検討という保留をもって、すべて承認された。その、二二年度事業報告・決算報告と二二年度事業計画・予算については、別掲をご覧いただきたい。なお、長時間に及ぶ役員会後、場所を移して出席者による懇親会を行った。

さて、母校や人文学部との連携については、山口大学全体の同窓会理事会や山口大学卒業式への出席、山口大学日中交流基金への寄付、人文学部大学院留学生への奨学金の授与等の協力・支援を行った。留学生への奨学金授与については別掲のように、本人からの寄稿もあるが、ここでも少しそのことに触れておこう。

他にも書かねばならないことや難題もいくつかあったように思うが、以上が「鴻文会、この一年」抄である。ここで、話を最初に戻して総括としてツイッターしておきたい。八〇〇〇人近い大所帯の、それも会員が全国に散らばっている同窓会となると、なかなか会員の実態がつかめないし、役員としてどのように動いたら良いものか分からない。果たして、同窓会は必要なのかというところまで行き着いてしまふが、同窓会というのはゆっくりと続けることに意味があるという考え方も分かる。でも、そのためにはなによりも、卒業生の消息の確保が必要だろ。私のように(男の)更年期になると、なにかと人づきあいがおっくうになつて引きこもりがちになつてしまふが、今、私は、同窓会への関わりが誰にとつても元氣と社交性を豊かにしてくれる「社会性ホルモン」になるのではないかと期待している。また、そのために大学にも、学生に、母校に対する思い入れが濃くなるような、付加価値の高い教育をお願いしたいと思う。今後のより良い鴻文会としての方向付けは、多くの会員の強い意思によって可能になるはずである。

次に、今年度第一回の鴻文会役員会について記しておこう。五月二日(一五時から事務所で、一四名の出席を得て行われた。会長挨拶・全員の自己紹介に続き、報告事項として、平成二二年度事業(総会・懇親会とその後の対応、三役会議での事務的な対応、会報「鴻文」第二九号の編集と発行、HPの刷新など)、山口大学同窓会理事会(別掲)等についての報告を行い、協議事項では、平成二二年度決算案および監査報告、平成二二年度事業計画案(運営、会員親睦事業、母校支援事業など)、平成二二年度予算案

(文理第一四回卒・ドイツ文学)



旧サビエル記念聖堂を模したイルミネーション(山口市河原町)



山口市役所とサビエル記念聖堂

日本のクリスマスは 山口から

平成21年度事業報告

1. 第36回・37回役員会 (4月25日・6月28日)
2. 人文学部創立30周年事業 (6月外灯設置)
3. 第8回総会 (8月12日)
4. 三役会議 (8月27・9月17日・11月14日)
5. 「鴻文」編集会議 (8月27日・9月17日・11月14日・12月1日・12月22日)
6. 山口大学同窓会理事会 (9月17日) (H.22年3月25日)
7. 会報「鴻文」第29号発行 (12月15日)
8. その他

平成21年度決算

収入総額	3,588,033円
支出総額	3,168,909円
残高 (次年度繰越金)	419,124円

収入の部

科 目	当初予算額	決 算 額
繰越金	33,661	33,661
会費収入	1,910,000	1,680,000
繰入金	1,200,000	1,275,308
賛助金	300,000	598,560
雑収入	0	504
合 計	3,443,661	3,588,033

支出の部

科 目	当初予算額	決 算 額
会議費	100,000	82,166
印刷費	250,000	260,190
郵送費	470,000	460,700
事務所運営費	950,000	843,320
ホ - ムベ - ジ維持費	130,000	121,414
事務費	25,000	26,097
山口大学同窓会分担金	150,000	150,525
奨学金	150,000	0
寄付金費	0	0
人文学部30周年事業	300,000	331,275
国際フォーラム支援費	0	0
慶弔費	50,000	30,000
積立金	0	0
総会費	750,000	843,572
予備費	118,661	19,650
合 計	3,443,661	3,168,909

特別会計

科 目	20年度財産	21年度財産
中国電力債	1,411,777	1,418,497
定額預金	5,630,000	4,359,000
合 計	7,041,777	5,777,497

平成22年度事業計画

1. H.22年度事業・予算検討委員会 (4月16日・5月7日他)
2. 三役会議 (5月7日他)
3. 第38回役員会 (5月22日)
4. 山口大学同窓会理事会 (開催日未定)
5. 「鴻文」編集会議 (開催日未定)
6. 会報「鴻文」第30号発行 (12月予定)
7. その他

平成22年度予算

収入の部

科 目	予 算 額	摘 要
繰越金	419,124	
会費収入	3,600,000	10,000円×360人 H22年度入学者 H.22.4/1～H.23.3/31納入者
繰入金	0	特別会計より繰入
賛助金	300,000	H.22.4/1～H.23.3/31
雑収入	876	利子等
合 計	4,320,000	

支出の部

科 目	予 算 額	摘 要
会議費	150,000	役員会、会報編集会議 「検討委員会」等の交通費、その他
役員等行動費	50,000	会長・副会長等活動費
事務所運営費	850,000	家賃、人件費、横断幕取付・撤去費 事務所経費 (電話、電気、町内会費)
事務費・通信費	125,000	封筒印刷5,000枚、事務印刷費 通信連絡、郵送、消耗品、雑費
会報費	630,000	印刷6,000部、郵送5,200部 発送アルバイト代
ホ - ムベ - ジ維持費	130,000	プロバイダー契約料、 メールウイルスチェック代、 謝礼、その他
分担金	150,525	山口大学同窓会 (手数料含む)
寄付金	100,525	山口大学教育財団「日中學術 交流基金」 (手数料含む)
奨学金	150,525	留学生への支給 (手数料含む)
総会費	0	
人文学部30周年事業	0	
慶弔費	50,000	他同窓会への祝い金、電報料
予備費	1,933,425	
合 計	4,320,000	

特別会計

科 目	22年度財産	摘 要
中国電力債	1,418,497	東洋証券
定額預金	4,359,000	
合 計	5,777,497	

平成22年5月12日 監査の結果過誤なく的確に経理されていることを確認します。

監 事 村 田 博
渡 邊 早 苗

山口大学同窓会／第五回理事会報告 一年かけて… 次期会長の選考を

- (1) 日時 平成二二年三月二十五日(木) 一六～一七時
- (2) 会場 山口大学事務局二号館／特別小会議室
- (3) 出席者… 全員出席、事務方も含め 二～余名。
- (4) 鴻文会出席者… 会長(岡光) 副会長(北川)
- (5) 議事 前回議事の確認… 承認(審議一分) 会則改正… 改正の要点(北川要約) 次表のとおり(審議一五分)

現 行	<p>第5条(役員)</p> <p>(1) 理事 一六名</p> <p>(2) 顧問 若干名</p> <p>(4) 顧問は学長と会長が理事会の同意を得て副学長若干名を充てる。</p>
改 正	<p>第6条(役員)の選任)</p> <p>(1) 会長の選任は理事の互選とする。</p> <p>(3) 理事は各同窓会が選出する者二名をもって充てる。</p> <p>(4) 顧問は学長と会長が理事会の同意を得て副学長若干名を充てる。</p>

改 正	<p>(1) 理事 二名以内 (削る)</p> <p>(1)…理事の推薦に基づき理事会が選任する。</p> <p>(3)…並びに学長と学長が指名する副学長若干名をもつて充てる。</p> <p>(4) 会長は理事会の同意を得て学長が指名する大学職員を顧問とすることができ。</p>
-----	---

会長後任人事…次期会長について選考委員会を設けて選考する。ために向こう一任期中について現会長等の留任とする。(審議三分) 議事の経過(主たる発言)

会長(議長)「当会も発足二年を経過、改選期を迎えた」

A 「事前に各学部から次期適任者を推薦せよ」ということで、当会は提出したが、ほかの学部から具体的な提出がないという状況で、当会提出のものは撤回させてもらいたい(↓了承)

会長「二月に手術したという体調もあり、任期満了を機に降ろさせてほしい」

「各学部からの推薦はない。会則では理事の互選だが…」

B 「体調という理由なら仕方ない」

C 「会長に腹案はあるか」

会長「順番どおりという方法がある。まだ残っている学部が一つある。順番からすると会だ」

D 「理事以外に適任者はいないか。選考委員会を設けて一年間かけて決めてはいかかか」

B 「大学運営の経験者でない」と基盤がない。幅広く探せばいる。現執行部の意向があってもよい」

学長「大学として会長をバックアップする」

B 「幅広く、押し出しのイイ人がよい。選考委員で説得に当たる」

E 「事務局が動く(事務局を動かせる)ような人がよい」

会長「では、暫定ということで一年間やりま。体の具合いを見ながら。次回に選考委員会のメンバーを決める」

F 「選考会では多数決方式は避けてもらいたい」

E 「本人の了解を取りつけるのは母体会が媒介するのではなく、選考委員のほうから直接進めてほしい」

B 「選考会では、まずどういう人が理想の会長か、そこから審議されたい」

C 「会長に近くについて意思疎通のできる人がよい」

C 「会長に向こう一年暫定というのでは失礼だ。一期留任ではどうか」

B 「副会長も留任では」

会長「副会長も留任とする」

会長「新会則により学長に理事就任をお願いしたい」

学長「了承します」

会長「顧問の選任についても学長に委任したい」

学長「会長とも相談して若干名を指名する」

(6) 丸本学長の状況報告(報告五分)

法人移行第一期を終え、五段階評価で五点

「四点の評価を得た」

会計不祥事については全調査を終えた上で一括して措置、報告したい。

(7) 感想と摘要

佐々木会長は先月来の術後の経過も良好の様子で、一段とさわやかなお顔をされています。



議長としてスムーズな議事進行ぶり。ことに会長後任の人事案件については、きわめて流動的な議事の進展にどきどき対応されていたのが印象的であった。

会長の人事案件の議事は、「ご本人の体調が理由では認めないわけにはいかない」という容認論で始まり、それに見合う経過を一通り踏みながらも、揚げ句は「落着くところに落着いた」という、これぞ「オトナの会議」であった。

顧問・理事の《増強》は、平成二七年度(二一～二五)予定の『開学二 周年記念事業』に備えてのこと。

なお、『開学一 周年記念』とは、左掲添記のような由来による。記念事業の内容は今後の企画に俟つ。

「開学一 周年記念」の由来(参考)

文化二二年(一八五)上田鳳陽が「山口講堂」を開設。儒学と武術を開講、教師十数名。彼の死後これが文学寮と兵学寮からなる藩校「山口明倫館」となり、幕末山口での教学の中心となったことから、明治以降の山口高等学校や山口高等商業学校にあってはこれを開校の起源と見なし、機会あることに謳ってきた。

新制山口大学も地元のこれら旧制の学校を前身視、母体視したことから、おのずと鳳陽の「山口講堂」をもって開基とする歴史認識が継承されてきている。ことに経済学部では寮舎名を「鳳陽寮」とし、また同窓会では「上田鳳陽資料館」(現在県立美術館敷地内)を設置するなど顕彰してきている。

なお、鳳陽の墓(嘉永六年没/八五才)は、山口市大内御堀の生家に近い乗福寺(臨濟宗)にあり、毎年二月八日の命日に供養祭が営まれている。

(「山口郷土読本」「山口高等商業学校史」など参照)

(文責 北川 健)

山口大学同窓会／第六回理事会報告 会員名簿の刊行や如何に

- (1) 日時：平成二二年七月二七日(火)一五～一七時
- (2) 会場：山口大学事務局二号館／特別小会議室
- (3) 出席者：全員出席、事務方含めて二二名
- (4) 鴻文会出席者：会長岡光・副会長北川
- (5) 議事
 - 前回議事要旨の確認：承認(審議一分)
 - 二二年度決算報告：費目「雑費」を「雑収入」に訂正して承認(審議六分)
 - 同監査報告
 - 二二年度事業計画
 - 会員名簿の刊行
 - 学生アドレスの活用
 - これら については、議長提案で「意見交換」として行われた(協議六二分)
 - 各学部同窓会から状況報告あり。
 - 「定期刊行してきていたが、個人情報取り扱いから、停止している」という学部同窓会が大半。
 - 「近期刊行の予定」「財団法人化を機に刊行したい」とする会もあり。
 - 名簿刊行の「業者委託」の近況についても、具体事例の報告あり。
 - 大学側から学生アドレスの話あり。
 - 大学自体「一日に二五万件」の迷惑メールがある由。
 - 学生への支援活動として「就職相談」「就職セミナー」など開設している事例も。
 - 総会への「学生招待」や「学生代表」の理事出席を定めている報告も。
 - 山口大学「創基二 周年記念」事業(二三分)
 - 大学側から仮称「創立」としてきたが、他大学の例など視野に入れて「創基」とし

た、などの説明があった。

・「二二 周年」を迎える大学は、全国で「東北大学に次いで二番目に古い」とのこと。

その他(一五分)

- ・大学側からHPの改善をするなかで、各学部同窓会の「行事予定」など提供したい。
- ・会長から各学部同窓会での「旅費規程」があれば提出してほしい、との要請。

(文責 北川 健)

山口大学との縁

衛 奮

山口大学での学生生活もあと四ヶ月しかありません。そう考えているだけで既に寂しく感じます。「日本に来てもう三年か」と思わず感想の言葉が出ました。山口大学に入った頃のことを今でもはっきり覚えています。

二〇〇七年一〇月に日本に来て岡山外語学院で日本語を勉強し始めました。二〇〇九年二月の大学院受験前に山口大学人文科学研究科の林先生とメールで連絡が取れました。元々は研究生を希望していましたが、林先生が私の日本語試験の成績を聞いて直接試験を受けてよいとおっしゃいました。その時受験することがすごく不安で、試験までの二ヶ月間ずいぶんストレスがたまっていました。その後試験を受けましたが、自分では全然受かるとは思いませんでした。合格できたのは、全て林先生が私を信じてくださったおかげだと思います。将来、日本語教師になるのが私の夢です。中国の大学での専門は日本語ではなかった私には、それは口に出すこともできないほど遠い夢でした。しかし、林先生がその手の届かない夢を当然のように認めてくださり、こんな私でも、叶えられると感じさせてくださいました。

入学後のことも心配でしたが、その時は面倒な引越しがもっと心配でした。しかし、お忙し

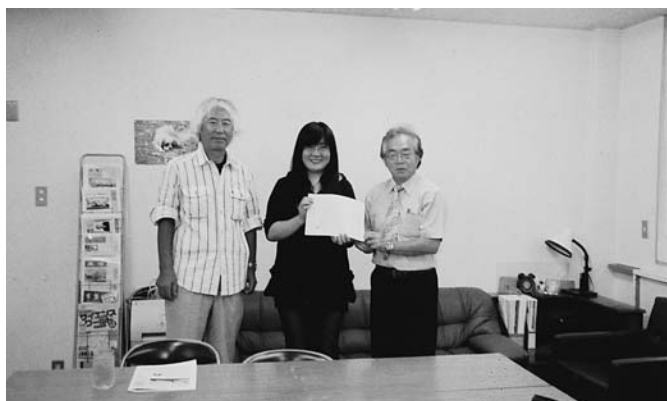
いと思った林先生が私を乗せて安い電気屋さんや家具屋さん連れて行ってくださいました。そればかりではなく、買った冷蔵庫や洗濯機を二階にある部屋まで運んでくださいました。そんな親切で優しい先生に、山口で誰一人として知らなかった私の心細さを癒していただきました。今でも思い出すと言葉では説明出来ないほど感謝の気持ちでいっぱいです。

山口に住みやすい所で、平穩に過ごしながら、学習にも専念して来しました。最初は日本の大学の授業に少し不安を感じました。特に、林先生の授業はペーパーが多く、人前で発表することも多いので、無口で話すことが苦手な私にとって決して楽な事ではありません。情けない事で、一年半経った今でもまだ完全に慣れていません。しかし、そういう授業形式は留学生にとって日本語を練習するいいチャンスであり、受講者全員にとってコミュニケーション能力を養う貴重な経験だと思えます。将来もし私も教師になれたとしたら、こういう皆が全員で盛り上がるのできる授業をしたいと思えます。

生活で色々お世話になった林先生は、学習面においてもたくさん助言してくださりました。先生のおかげで、山口大学の「文学会志」に論文を発表することもできました。林先生からいただいたご恩は一生忘れません。

もう一人挙げなければならぬのは磯部先生です。私は磯部先生ご指導の下の学生ではありませんが、先生から論文についてのご指導もたくさんいただきました。大きな問題から細かい文法の間違いまで、いつも丁寧に教えていただき、その根気強さと親切な態度に励まされました。特に、今回山口大学鴻文会の本年度「留学生奨学金」をいただけることも磯部先生の推薦のおかげです。本当に感謝しています。

二〇一〇年七月二七日に、鴻文会の事務所内で奨学金を授与していただきました。鴻文会会長の岡光先生と副会長の北川先生がその場にいらつしました。会長も副会長も偉い方だと思いい、授与されるのも私一人だけで、緊張のあまりに体も硬くなってしまいました。しかし、岡光会長も、北川副会長も、親切に話し掛けてく



鴻文会事務所にて

ださいました。日本での生活について尋ねてくださったり、中国のことも話してくださったり、おいしいケーキと冷たいお茶までご馳走になりました。蒸し暑い七月に、会長と副会長のご親切なお言葉、よく冷えたケーキとお茶が涼しい風のように、私の緊張感を吹き飛ばしてくれました。

奨学金をいただけたことは、私の生活に大変役に立っただけでなく、精神的にも支えてくれました。奨学金を授与されたことは、私が山口大学で今まで頑張ってきたことへの是認であり、私自身を認めていただいた証でもあります。私たち留学生をご支援くださった鴻文会に対して、ほんとうに感謝しています。

山口大学と、山口大学でお世話になった先生方との縁は一生切れないものだと感じています。全ての気持ちを一つの言葉に込めて「ありがとうございます！」。

*衛さんは平成二二年度鴻文会留学生奨学金事業より、奨学金を授与された留学生です。

人文学部教育職員紹介

(平成二十二年一月現在)

学部長(併)
教授 湯川 洋司

人文社会学科

哲学・思想コース
教授 高木 智一
教授 豊澤 弘一
教授 脇條 靖弘
教授 Alan Djunali
准教授 柏木 寧子
准教授 古荘 真子
准教授 藤川 真哲
講師 田中 均

歴史学コース

教授 中村 友博
教授 田中 誠二
教授 瀬田 厚
教授 橋本 義則
教授 馬本 義
准教授 滝野 正一郎
准教授 藤永 康
准教授 真木 裕一
准教授 村田 行政

社会学コース

教授 辻 正二
教授 湯川 洋司
教授 坪郷 彦
教授 横田 尚俊
教授 高橋 征仁
准教授 速水 聖子

言語文化学科

日本語・日本文学コース
教授 林 伸一
教授 平野 芳信
准教授 磯部 佳宏
准教授 森野 千弘
准教授 尾崎 佳

中国語学・中国文学コース

教授 阿部 泰記
教授 富平 美波
教授 根ヶ山 慎一
准教授 更科 徹

アジア言語コース

教授 平野 尊
准教授 和田 学

英語学・英米文学コース

教授 岩部 浩三
教授 太田 聡
教授 宮原 成
教授 池園 宏
准教授 赤羽 仁志
講師 メドロック 麻弥

ヨーロッパ言語・文学コース

教授 井上 三朗
教授 本田 義昭
教授 Hintereder Ende Franz
准教授 下寄 正利
准教授 武本 雅嗣
准教授 坂本 貴志

言語情報学コース

准教授 Phillips John David
准教授 乾 秀行

学生数
平成二十二年一月現在

	人文社会学科	言語文化学科	合計
1年	103	101	204
2年	98	90	188
3年	104	96	200
4年	120	112	232

人文科学研究科

	地域文化専攻	言語文化専攻	合計
1年	5	7	12
2年	4	3	7

平成二十一年度
学部卒業生・大学院修了生進路状況

	学部卒業	大学院修了		学部卒業	大学院修了
建設業	2		飲食店・宿泊業	2	
製造業	12		生活関連サービス、娯楽業	6	1
電気、ガス、水道	2		医療・福祉	6	
情報通信業	7		教育・学習支援	17	1
運輸業	5		複合サービス事業	4	
卸売・小売業	23		サービス業	3	
金融・保険業	11		公務	22	1
不動産業	0		上記以外	0	
学術研究・専門技術サービス	1		進学	7	

産業分類別に集計したもの

研究室紹介

英語学・英米文学コース

平成一九年度に行われた人文学部講座再編により、言語文化学科は従来の三講座制からアジア言語学講座と欧米言語学講座の二講座制へと移行しました。これに伴い、学生の所属するコースについても再編が行われ、旧英米語文化論コースは英語学・英米文学コースへと新たに名称を変更しました。もともと、コース内で日々行われている研究教育の内容に関しては、もともとの母体となった旧小講座時代の英語学・英米文学両講座の頃より、それほど大きな変動があるわけではありません。両分野の学問が時の経過とともに進歩前進を遂げているのは言うまでもありませんが、同時に、時代の波に安易に流されることのない確たる伝統を、教員も学生も大切に受け継いで今日に至っております。

それでも、ここ数年の間に所属教員の顔ぶれには少なからぬ変化がありました。旧教養部改組直後には英語学四名、英米文学四名の教員が在籍していましたが、現在は各三名、計六名でコースを運営しております。最近の移動についてご報告しますと、英語学分野では平成一四年七月に寺田寛先生が大阪教育大学へ、平成一五年三月に鳥越郎先生が東北大学へそれぞれ転出され、その後、鳥先生の後任として平成二〇年一〇月に赤羽仁志先生が着任されました。英米文学分野では、長年教鞭を執ってこられた伊豆大和先生と田中晋先生が、それぞれ平成一八年と一九年の三月に惜しまれつつもご退職となりました。伊豆先生の後任として、平成一八年四月からはメドロック(旧姓皆尾)麻弥先生が新たに着任されました。メドロック先生は現在育児休暇中という事情もあり、伊豆先生と田中先生には引き続き非常勤講師として毎週ご足労

願ひ、コースを支えていただいております。

学生の動向に関しては、基本的に従来とそれほど変わってはおりません。毎年、最大で三〇名の学部学生が、英語学・英米文学コースへの期待を胸に進級してきます。学生たちは二、三年の段階で受講する講義から多くの学問的素養を培い、最終学年においては、各自の専門的関心に基づいて意欲的に卒業研究(英語学)や卒業論文(英米文学)に取り組んでいます。人文学部の六階にあるコースの研究室では、勉学に勤しむ学生の姿が毎日多く見受けられます。もちろん、勉学以外の面でもコース内における交流は盛んで、新歓コンパや夏のバーベキュー大会、冬のクリスマス会などの各種イベントには、多数の学生や教員が参加してコースの雰囲気盛り上げています。

昨今の経済不況や就職難などの社会的情勢を反映して、学生が三年時から就職活動を行わねばならなくなったり、またそれに関連して、海外留学の志望者が減少する傾向にあるなど、やや遺憾に思われる今日的現象も見受けられますが、総じて見れば、学生たちは皆それぞれに充実した大学生生活を送っているように思われます。また、少人数ではありますが、より高度な専門的研究を行う大学院生も日々弛まぬ研鑽を積んでおり、彼らの学問に対する真摯な姿勢は学部学生にも良い刺激を与えています。

最後にコースの同窓会についてご紹介致します。ご存じの方も多いとは思いますが、私たちのコースでは、四年に一度の鴻文会総会に合わせる形で同窓会を開催しております。会には現在の教員スタッフのみならず、ご退職になられた懐かしい先生方にも多くご参加いただいております。同窓生の方々にはご案内通知をお送りしていますが、昨年度は参加者不足のため、残念ながら開催を見合わせる結果となりました。次回には平成二五年を予定しております。楽しい会となるように企画を進めてまいりますので、皆様方には是非お越し願ひ、旧交を温めていただければ幸いに存じます。

(コース委員 池園 宏教授)

平成二二年度人文学部生涯学習事業

山口大学人文学部は今年度、生涯学習事業として、やまぐちサタデー・カレッジ、公開講演・出前講義の三つの活動を行ってまいりました。

(一) やまぐちサタデー・カレッジ

(公開講座)

地域社会の方々や学生が共に学ぶ場として平成一三年度に始まったサタデー・カレッジも、今年で一〇年目を迎えることとなりました。今年度は前期・後期ともに一講座ずつの開催です。やまぐちサタデー・カレッジには、異文化交流コース、やまぐち学コース、日本文化コース、現代文化コース、外国語学習コースの五コースがございます。本年度前期は、現代文化コースで、田中均講師の「演劇とパフォーマンス」の現在、六月五日から六月二六日までの計四回開催され、二名の方々が受講されました。後期は、やまぐち学コースで、村田裕一准教授の「山口県における鉄路のはじまり」が開催中です。一三名の方々が受講されています。一〇月一六日から一二月六日までの計四回の開催です。

山口サタデー・カレッジにつきましては、山口大学エクステンションセンターが受け付け窓口となっております。電話番号、URLは左記の通りです。

山口大学エクステンションセンター
TEL 083-933-5059
URL <http://www.ext.yamaguchi-u.ac.jp>

(二) 人文学部公開講演

人文学部は、毎年一回、二名の教員が山口県内の山口市以外の都市に出向いて、一つのメインテーマの下に公開講演を行っていますが、今年で二三回目を数えます。今年のメインテーマは「失われていく言語の多様性を守るために」で、乾准教授とフィリップス准教授が担当され

ます。演題はそれぞれ、乾准教授が「世界言語の多様性」、フィリップス准教授が「少数言語の機械翻訳」です。一月一三日に、周南市徳山保険センターで開催されます。なお、今回の講演は、周南市教育委員会と山口大学人文学部後援会のご協力を得ております。

来年度も、県内の別の地域で、メインテーマを変更して、公開講演を行う予定であります。公開講演は入場無料で、お申込みも不要ですので、お近くで開催の折は、是非ご来場下さい。

(三) 出前講義

山口大学では、教員が県内外の高校等に出向き、専門分野のことについて分かりやすく講義をする出前講義を実施しております。人文学部の教員も、毎年数件の出前講義に出向いております。出前講義も、やまぐちサタデー・カレッジと同様、山口大学エクステンションセンターが受け付け窓口です。各教員の講義題目・講義内容は、エクステンションセンターのホームページでご覧いただけます。

(人文学部生涯学習推進室長 下寄正利准教授)



人文学部公開講演

和田・八木両先生 瑞宝中綬章叙勲

このたび、和田敏英先生、八木充先生には平成二二年度春の瑞宝中綬章を叙勲されました。
両先生の荣誉をたたえ、お慶び申しあげ、ご近況をつかがうべく当欄「恩師健在」にご寄稿いただきました。
心からお祝い申し上げます。

恩師健在

温故知新



和田敏英

まず初めに、鴻文会誕生の経緯をあらまし振り返っておきたい。
過ぐる一九五三年三月、山口大学文学部では、文学科二四名と理学科一五名の第一回卒業生が巣立った。その翌年には、早くも文学部学部長を会長とする文理学部同窓会が正式に発足した。

しかし、他学部の同窓会の場合とは異なり、この文理学部同窓会とその前身母体たる旧制山口高校同窓会との間には、必ずしも十分な意思疎通がなかった。だが幸い、旧制山高出身の歴代理文部学部長の配慮によって、「文理学部卒業生名簿」は、旧制山高同窓会会員録の巻末に収録され、このような合冊名簿が三たび続いたのである。

この後は教養部創設（一九六七年）とそれに続いた大学紛争の影響もあって、学内に設けた名簿刊行委員会による『山口大学文学部卒業生名簿』（一九七六年）がようやく発刊されただけであった。

やがて多年の宿題が叶って、一九七八年六月、文学部は改組され人文学部と理学部とに分離独立した。この現状に即して、その秋一〇月末に開催された文理学部同窓会は発展的に解消し、同時にわれわれ文学科は人文学部と一体になり、その第一回総会において新同窓会「鴻文会」が結成されたわけである。

なお、人文学部は着々と整備拡充され、吉田地区の六階建新校舎に移るとともに、一九八五年には遂に大学院人文科学研究科（修士課程、入学定員八名）が設置され、鴻文会は院の修了者をも迎え入れることになった。

二

さて、鴻文会は「鴻文会会報」創刊号（一九八一年）及び第一回の『鴻文会会員名簿』（一九八二年）を刊行し、会員相互の連帯と親睦の増進はもとより学部の発展にも寄与することを指向したのである。

鴻文会の主要な行事として特筆すべきは、四年ごとに開催の総会・懇親会と公開講演会である。

第二回総会・懇親会（一九八五年一月）山口大学学生会館

河野桐果氏（文理社会学第一回卒 厚生省人口問題研究所人口政策部長）

演題「人口高齢化を考える」
人文学部一〇周年記念行事

学部の前庭にクスノキ二本植樹

記念講演会（一九八八年五月）人文学部
柴田俊造氏（文理国文学第四回卒 東海大学留学生教育センター教授）
演題「日本留学生受入れの経緯と問題点」

松浦亮氏（文理英米文学第六四回卒 中国新聞販売局次長）
演題「大学と社会」

第三回総会・懇親会（一九八九年一月）学生会館
重中十士朗氏（文理国史学第一回卒 元NHK山口放送局副局長）
演題「テレビ報道三五年 誤報と真実の間」

第四回総会・懇親会（一九九三年八月）学生会館
原野和夫氏（旧制山高第二六回卒 元時事通信社長 現パシフィック野球連盟会長）
演題「分水嶺の日本」

第五回総会・懇親会（一九九七年八月）学生会館
松尾龍彦氏（文理社会学第二回卒 元NHK解説委員）
演題「急がれる日本の司法改革」

人文学部創立二〇周年（一九九八年）
クロガネモ子記念植樹

第六回総会・懇親会（二〇〇一年八月）学生会館
理学部同窓会「鴻理会」と合同開催
松下孝幸氏（文理生物学第二二回卒 土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム館長）
演題「人骨から日本人の起源と未来を探る」
（日本人のルーツ）

第七回総会・懇親会（二〇〇五年八月）学生会館
林田慎之助氏（文理中国文学第五回卒 神戸女子大学文学部教授）
演題「寛政異学の禁と二人の儒侠 亀井南冥と亀田鵬斎」

人文学部創立三〇周年（二〇〇八年）
外灯寄贈（人文学部中庭）

第八回総会・懇親会（二〇〇九年八月）山口市湯田温泉ホテルニュータナカ 再び鴻理会との合同開催
原早苗氏（文理社会学第二〇回卒 消費者行政推進会議委員）
演題「消費者庁・消費者委員会発足が問いかけるもの」

近藤広一氏（文理化学第一八回卒 本田技研

工業株式会社副社長）
演題「ホンダのグローバル経営」

三

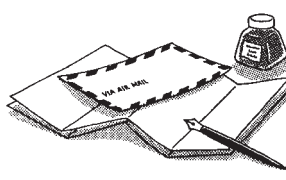
このように、鴻文会が学内外の諸情勢に対応して、さまざまな困難を克服し着実に発展してきたのは、特に歴代の会長、学内幹事、役員の間並ならぬ尽力の賜にほかならない。願わくは、わが鴻文会がその名の由来に恥じず、雄飛していくことを念ずるのみ。

三〇年一昔。顧みれば、旧制山高、文学部文学科、人文学部と三者それぞれに籍を置いたわが身も、はや傘寿を迎えて懐旧の情尽きず、敢えてかの西行法師の歌にあやかり、この拙文を結ぶことにしたい。

年たけて又越ゆべしと思ひきや
いのちなりけりさ夜の中山
（文治二年 六九歳）

付・参照

- 一、「鴻文会会報」創刊号（一九八一年二月）
鴻文会の発足を機会に
- 一、「山口大学三十年史」（昭和五十七年二月）
- 第二編 第一章 人文学部 第五節 文学部同窓会（三一―三五頁、一八頁）
- 一、「鴻文会会報」第九号（平成二年一月）
鴻文会 二期八年の歩み
（文理第一回卒・英米文学）



性」を気づかせてくれた。

翌年一〇月、石見銀山の世界遺産登録を契機にして、私は、北海道から沖縄までの小学校から大学までの教員で構成される「地域から考える世界史」プロジェクトというgoogleのグループサイトを結成した。その多くは、高等学校の世界史や日本史の教員であるが、研究者は、歴史学だけではなく、音楽、思想史、水中考古学など多岐にわたる。活動はネット上における情報や意見交換の他、年一回の研究報告会で、会員は、現在、一五〇名を数え、研究報告会は今年の下関で四回になる。

「地域の中から世界史を学ぶ」という視点に基づくと史実が、二〇一三年から始まる新学習指導要領下の世界史教科書にも「日本列島の中の世界史」という形で記述される。まさに「地域から考える世界史」は、時代が求めた視点であったのかも知れない。

「あの時、あの場所にいなかったら」と、歌の歌詞ではないが、私の世界史の教員としての人生にとって、二〇〇一年は大きな分岐点をはらんだ年であったと言えるかも知れない。

(人文第一回卒・西洋史学/人文院第一七回修了)

心のふるさと

原口 公康



先月・先ヶ月と出張した折、大学時代の友人たちと久々に会うことができた。一年ぶりに会う友人もいれば、およそ二〇年ぶりに会った友人もいた。大学卒業後は、それぞれの道で頑張っており、年を取ることに仕事も忙しく、また家族のこともあり、ゆっくり会って酒を飲むということがなかなか出来なかった。が、今回、

その念願がやっと叶った。

本当に多忙な中にも関わらず、都合をつけて来てくれた友人との再会は、意外にスムーズに進んでいった。長い間、会っていなかったブランクは全く感じられなかった。それどころか、卒業してかなりの月日が経っているのに、お互いに腹が出たり、髪が白くなったり薄くなったりと、明らかに「オジサン化」しているにも関わらず、話を始めるとまるで今が学生時代かと錯覚するぐらいいろいろな話が出来た。特に仲間と一緒に汗を流した部活やプライベートが全くなかった下宿生活の思い出などは当時を懐かしく思いながら大変話が盛り上がった。本当に楽しい時間をプレゼントしてくれた友人たちに心から感謝している。

思えば、高校を卒業し、初めて親元を離れた不安と、親の束縛から解放されて手に入れた自由というものに戸惑いながらスタートさせた大学生生活。先輩や後輩との関わりの中で、「自分」というものを見つめ始め、そして、少しずつ自分を理解していったのが学生時代だった。

また、青年期特有の正義感や純粋さで、社会や大人に対する憤りや葛藤を感じながら、自分なりに精一杯生きていたのが山口大学での学生時代だったと思う。そんな青春時代だったからこそ、たくさんの思い出を残すことが出来たのだと思う。

山大人学前も在学中も、私は大学を卒業したら故郷の福岡に帰って教師になるつもりでいた。だが、人生というのは本当にわからないもので、四年間の予定だった学生生活は最終的に五年間となり、都会に帰るつもりが、緑いっぱい自然に囲まれた環境じゃないと生きられなくなり、結局、気がついてみたら、大学時代からそのまま山口県に居ついてしまい、山口県人と化してしまっただけだ。たまたま現在、山口市を離れ、萩市在住。

というのも、大学卒業後、山口で一年間企業に勤めたあとそのままこの地で念願の教師になることができたのである。ちょうど「平成」という元号が始まった年、山口市にある野田学園中学高等学校に採用された。いつの間にか今年

で二二年目となる。学校では社会(地歴公民)科を担当し、中学生と高校生に授業や部活動を教えながら充実した毎日を送っている。

近年、私の勤務する野田学園高校の卒業生が毎年山大に一〇人前後入学するようになった。中には人文学部へ進学するものも出てきた。「研究室は日本思想史がいいぞ」とアドバイスしているのは言うまでも無い。ほんの少しだけはあるが、人文学部の卒業生としての責任を果たしているかなあと、思っている。もちろん、これからはもっと多くの生徒を山大へ進学させたいと思っている。関係の先生方、その際は何卒宜しくお願い申し上げます。(笑)

ところで、最近の山口大学は学内の改革が積極的に行われ、学問研究を初めとして、キャンパスの整備も大胆に進められている。昔の卒業生にとって懐かしい正門や駐車場周辺は、生まれ変わって、新生山口大学を象徴するような明るさと新鮮さを感じさせる。もちろん、人文学部周辺も昔の空きスペースに新たな建物建設されたり改修なども行われており、私が現役学生として通った時分とはかなり違った雰囲気になっている。(詳しくは大学のホームページ等を参考にしていただくと幸いです！)

二一世紀になってはや一〇年、世の中が大きく変化している。これまでどおりのことをただ踏襲しているような組織や団体は次々と世間の荒波に飲み込まれていく時代である。そのような厳しい時代だからこそ、大事な母校である「山口大学」が今後ますます発展し、卒業生が胸を張れる大学に発展することを期待するとともに、全力で支援していきたいと思う。特に、「人文学部」にはその中核となつて、大学全体をリードするような存在になって欲しいと思う。まずは私自身が卒業生の「心のふるさと」を守り抜くために鴻文会の一員として頑張りたいと思う。

(人文第七回卒・日本思想史)

研究室同窓会報告

第三回社会学同窓会総会・交流会

宮藤 隆夫

昭和五三年の発足以来毎年欠かさず開催されてきた社会学同窓会総会は、回を重ねて本年は第三回の総会開催のはじまりとなりました。本年の総会は、平成二二年六月五日の土曜日(総会は、毎年六月の第一土曜日の開催が恒例となっている)、午後四時から山口市熊野町の防長苑で開催されました。また、総会終了後交流会が行われました。

当日の出席者は、先生方のご出席は、出席の八ガキをいただいていた小川全夫先生が急用のため残念ながら急遽出席が叶わず、欠席となり、本年三月をもって退職された小谷典子先生、現教員の横田尚俊先生、そして、小谷先生の後任として本年四月にご着任されたばかりの速水聖子先生のお三方でした。

同窓会会員の出席は、昭和二九年(第二回)の卒業で、総会には毎年欠かさず出席されている松崎公彦、宮川秋三の両大先輩をはじめ、平成一四年の卒業で一番若い要貴志さんまで総勢二二名、このうち県外からの出席者は、鹿児島県、福岡県(二名)、広島県からの四名、また、女性の出席者は、四名でした。

総会は、森重祐二副会長(昭和五五年卒)の司会進行により始まり、議事は、会長あいさつ、来賓あいさつの後、平成二一年度収支決算報告が行われ、村田博監事(昭和四二年卒)が監査結果の報告を行い、異議なく全会一致で収支決算が承認されました。

続いて、小谷先生に対し、昭和四四年一〇月のご着任以来、長年にわたって同窓会に対し多大なご支援を賜ったことへの感謝の気持ちを表すため、同窓会から心ばかりの記念品(図書券)が贈られました。同窓会に対する小谷先生の今

日までのご支援を心から感謝し、先生の今後の「ご多幸」「ご健勝」と活躍を心から祈念申し上げます。

その後、このたび新しく着任された速水先生が自己紹介された後、横田先生から研究室の近況報告が行われ、総会は予定通り無事終了しました。

総会終了後、引き続き別席に移動して交流会に移り、宮川先輩の乾杯の音頭により開宴し、歓談、出席者一人ひとりが思いつくままに近況報告を行い、予定の二時間を少しオーバーし、交流会は盛会裏にお開きとなりました。速水先生は、「ご主人が単身赴任中のためお子様連れでのご出席であり、これにより交流会の場の雰囲気が一層明るく和やかなものとなりました。」

社会学同窓会が開催される六月の第一土曜日は、山口市の市街地を流れる一の坂川のホタル祭りが開催される時期と例年重なります。当日も、一の坂川周辺では「ホタル観賞の夕べ」が開催されており、今年はホタルの飛び始めるのが遅かったせいも、ゲンジホタルの乱舞は見られませんでした。ホタルの数より多い観賞客で一の坂川兩岸はかなり混雑してありました。

今年は、例年出席されている同窓生会員に、当日所用のため都合がつかない方が特に多くありました。このため、今年の総会・交流会は、いつもより多少寂しいものとなりました。また、出席メンバーもここ数年顔ぶれもやや固定してきている感じがしなくてもありません。

社会学同窓会の総会・交流会は、歴代会長やお世話人のご心配により同窓会発足以来三〇有余年毎年欠かさず開催されてきております。したがって、今後でもできる限り毎年開催され、会員相互の交流の輪が広がることに、会員の同窓会への参画意識が高まっていくことにより、同窓会の存在意義が深められることが望ましいものと、現在同窓会のお世話をされる者の一人として考えております。そのためには、開催会場や交流会会費などを更に工夫し、できるだけ多くの会員の皆様に総会・交流会にご出席していただけるような環境づくりに配慮が必要ではないかと感じております。

来年の社会学同窓会総会・交流会に若男女を問わず多くの同窓生会員の皆様方のご出席を心からお待ちしております。
(文理第一五回卒・社会学)

同期会同窓会報告

七〇年代への時間旅行

南里 義則

このほか暑さが厳しかった今夏の余韻を引きずったような、秋とは思えない強い陽射しが照り付けた一〇月二日の昼。四〇年前に初めて山口大学キャンパスで出会い、時間を共有した後、それぞれ離れ離れになっていた二五本の軌跡が再び山口の地で交わった。

再び軌跡が交わる「約束の場所」となったのは、山口市湯田温泉の防長苑。集まったのは一九七一（昭和四六）年四月に文理学部文学科に入学した約八〇人中、三割に当たる二五人（男性二人、女性一三人）。遠くは千葉市から空路駆けつけた男性、大阪府高槻市から新幹線で来た女性もいた。長崎市や佐世保市から列車を乗り継いで来た男女も。

受付で氏名を名乗り、会費を払いながら、チャリと会場入り口付近にたむろする男女を見て、目を見開きながら「もしかして、さんじゃない？」。「さんでしょー」。記憶の底に眠っていた互いの昔の面影を思い出し、再会を喜び合う笑顔があちこちではじけた。

私たちが山大に入った四〇年前。キャンパスでは、大学解体などを叫んだ七〇年安保闘争の残り火がまだくすぶっていた。学生運動のセクト間の対立も続き、角材を手にした学生同士による流血騒ぎなども起きていた。入学式は、前年度入学の教養部生たちが実施したロックアウ

トのために行われず、授業もなかなか始まらなかった。そんな混乱期に教養部時代を共に過ごした同窓生が四〇年後のこの日再会できたのは、ひとえに六人の発起人のうち福岡に住む女性、奥田和子さん（西洋史学）の根気強い幹事業務のおかげだった。

さて、会が始まった。乾杯の音頭は発起人の一人の男性が取った。彼は教養部時代こそ授業に出てきていたものの、専攻科に進んで次第に顔を見せなくなり、人より一年長く大学に籍を置いた苦勞人だった（というか、発起人に名を連ねた私を含む男性四人全員が「諸般の事情」で留年した苦勞人？だった）。

乾杯の後、料理が運ばれて歓談に入った。五つの丸テーブルに五人ずつが着席（席はあらかじめクジびきで決定）し、料理を食べ、酒を酌み交わした。頃合いを見計らって、出席者全員による三分間スピーチが始まった。

独身を通しての女性や子育てを終えて、自分の時間を楽しんでいる女性もいれば、がんを発症して手術を受けた男女、訳あって離婚した男女、会社を辞めた男性：など文字通り「人生いろいろ」。同世代が体験してきたそれぞれの半生の断面に、自分の「今」を重ねたのはたぶん、私だけではなかっただろう。

中には「五五歳で再婚しました」とラブラブの熟年結婚を報告する女性や「適齢期の娘がいて婚活中です」としつかりアピールする女性などもいて一緒に笑ったり、考え込んだりしながら濃密な時間が過ぎていった。

「慶応大で経済学を教えている」とか「おはなしおばさん」を続けている。など、出席できなかった同窓生からの近況報告を添えた名簿も配られ、その場にはいない同窓生のこともそれぞれのテーブルで話題に上った。

それにしても、何がこの二五人を山口の地に引き寄せたのだろう。出席者の一人の男性がスピーチで指摘し、皆が共感したのは「タイムミンが良かった」こと。五七歳・六〇歳のいわゆるアラカン（アラウンド遺暦）世代は会社勤めなどの現役ではあっても第一線をそろそろ退く時期であり、子育てもほぼ卒業して自分の時間

が持てる時期でもある。加えて同世代を共有した者同士、時を超えて「青春の現場で再会したい」との思いが二五人を呼び寄せたということなのだろう。

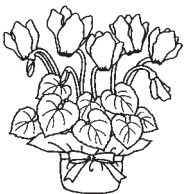
一次会は三時間余りで終了。しばし間を置いて、午後五時半過ぎから、防長苑近くの飲食店「土火土火（どかどか）」に会場を移して二次会を決定した。二次会にも男女一五人が参加し、午後八時すぎまで宴は続いた。

何人かはそのまま防長苑に宿泊し、翌日、雪舟庭など山口市内の散策を楽しんだ。その一人で、最も遠方の千葉市から片道五時間ばかりで駆けつけた男性は「山口に来たのは同じ専攻科だった友人の結婚式に出て以来、二五年ぶり。久しぶりに再会したみんなが元気そうで、よかった。特に女性たちはハツラツとしていたなあ」との感想だった。

確かに、三五・四〇年の年月を経て再会した同期入学の面々のうち、男性軍は人生の疲れを背負い込んでいるような印象があったのに、女性はおしなべて元気で、ハツラツとしていた感があった（ような気がする）。

こうして、二五人の「一九七一年度山大文学科入学者」による「同窓会」というタイムマシンに乗っての七〇年代前半への時間旅行は無事終了した。発起人の一人の年長の男性が次回の幹事役を快諾。一年か二年後に再び会うことになった。昔を懐かしむためだけでなく、これから生き抜く元気を互いに与え、与えられる絆を確認し合おうと、次の再会を約束して、私たちはそれぞれの現場に戻っていった。

(文理第一四回卒・国史学)
*写真は最終ページに掲載



鴻文会「賛助会員」の制度について

各位のご協力をお願いします。

鴻文会活動は、実質毎年入学される新入生が「ご入金下さる」「終身会費」(一万円)、合計一九〇万円をもとに行われます。

鴻文会はこの二九年の間、同窓会総会の開催、名簿管理、会報発行、ホームページ管理などの活動を行い、最近では「留学生への奨学金支給事業を開始し、活動も多様化しております。それらの活動を支える資金は、昨今の厳しい経済状況もあって、決して安心できる状態ではありません。そのような中であって、ここ数年、卒業生会員や元教員の皆様から多額のご厚志をいただき、本年度開催の諸活動の資金に充てることができました。ひとえに皆様のお力添えのためものです。

活動を支えて下さった方々のお名前を左に記して、お礼に代えさせていただきます。

なお、本年度も、賛助会員について、引き続きお力添えを賜りますようお願い申し上げます。加入者名「鴻文会」(郵便振替口座〇一五〇〇四 一五九〇二)と記した振替用紙を同封しております。それをお使いいただき、一口千円のご寄付を、よろしく願います。

平成二二年度賛助会員(順不同 敬称略)

磯部薫、桑木紀雄、住吉隆義、西川博喜、中島信彦、永久宣夫、萩原正之、松本馨、富尾諒子、濱村祐子、秋村寛之、林協三、沖中武志、高橋幸輔、村上正和、柏本秋生・朝子、松元真佐子、日野綾彦、青木寛、城島起臣、藤井英樹、藤田和彦、濱崎勢津子、芳野奈央、細山田康弘、前原洋子、渡邊陽介、野村明夫、山本力、鳥越郎、後根弘子、野村悦子、岡崎博之、江見伸子、平田昌司、藤井大輔、中司誠二、宮原省吾、川村崇臣、近藤千鶴子、小川朝子、小野徹、岡村君子、須々木由美子、國弘豊嗣、中村恭亮、橋

本学、村田美代子、村上秀夫、宮崎祐子、田中加代子、中野毅、生野龍二、伊藤綾子、中島康吉、高橋亜希子、小倉博美、三谷ちはる、利重迪子、中垣八朗、三木允彦、宮村廣美、桐原恵子、椎野由紀子、永久亨・珠紀、脇正典、福家里奈、吉村崇、田村浩三、外山紀久子、徳久玲子、金子建二、石川哲也、三井雅子、原早苗、河口正、花木直子、小西啓子、河中西一、多田幸子、内山宣子、田中晋、和田康治、戸谷美代子、林紀元、西本青而、上野孝子、利重真美、池田厚子、谷ゆかり、竹田守恵、野村大介、岩熊寛、奥田和子、福原綾子、東玉恵、中沢智美、宮原貴子、小池美佐子、砂田茂子、田中伸、村田和夫、伊豫英城、藤井日正、河本和子、長尾晴子、小田稜亮、沖田光春、藤林容志、本馬貞夫、井上範子、井上基子、井上真理子、吉田俣生、奥嶋明子、中嶋みどり、原口公康、竹内通弘、六百田麗子、吉野沙耶香、小山良昌、青木亜希子、藤永公然、廣永幸恵、笠井靖子、溝部忠増、八田順子、山本公吉・啓子、大港章子、岡ゆみこ、中村あけみ、光永昇、平川寛子、菊谷進、桑野友絵、田澤明子、宮藤隆夫、赤梨和則、鎌田繁和、小野知子、豊澤裕美、鈴木博司、尾野江愛子、松本英子、辰巳郁子、坂本友里、山本孝夫、平田真司、野口鈴子、武居スミヨ、田中大介、吾郷あきこ、岩田肇、麻生裕子、松元真佐子、内山俊彦、水畑哲也、久保博務、尾高晋己、勘解由小承子、中島美代子、岩永逸郎、食場秀美、鈴木雅之、松尾泰代、寺田寛、林久博、石原憲一、佐上ルミ、殿河内恭子、塩治明江、登城孝胤、中戸義幸、弘中榮一、松崎公彦、渡邊紘史、梅井理恵子、倉重雅子、小野美典、柴田俊造、柴田和枝、浅見洋二、榎本美由紀、岩尾功一、酒井由紀、貫加奈子、富田一彦、森江裕孝、上村義信、青木隆子、渡邊早苗、東玉恵

「ご協力ありがとうございました。」

鴻文会 会員名簿利用規則

- 一、会員名簿の更新(新規入会、異動に伴う)と保管は事務局で行う。
- 二、会員名簿は会員に限り開示することを原則とする。
- 三、会員名簿は、会員相互の親睦、会の発展を目的とした利用に限り使用することができる。営利を目的とした利用は禁止する。
- 四、会員名簿の開示は、直接に事務局で求めるか、郵便またはファックスで申し込み、事務局は、申し込み者が会員であることを確認して会員名簿を送付する。これにかかる経費は利用者が負担する。
- 五、会員名簿の開示申請者名簿(利用者名簿)を作成して事務局で保管する。



鴻文会と鴻理会による「祝入学」の横断幕

《住所変更連絡のお願い》

毎回たくさんの郵便物が返却されてきます。

住所に変更があった場合はご連絡をお願いします。

鴻文会事務局 Fax: 083 - 928 - 4527

E-mail: fycsf998@ybb.ne.jp



「人文学部創立30周年記念」鴻文会寄贈の外灯

鴻文会会則

(総則)

第一条 本会は鴻文会と称し、事務所を山口大学人文学部内におく。

第二条 本会は会員相互の親睦をはかり、山口大学人文学部の発展に寄与することを目的とする。

第三条 本会は前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

- 1、会報及び会員敬慕の発行
- 2、会員相互の連絡、親睦の増進
- 3、その他必要と認められる事項

(会員)

第四条

1、正会員 山口大学文学部文学科卒業生、人文学部卒業生、文学専攻科修了者及び大学院人文学部研究科修了者

2、準会員 山口大学人文学部学生及び大学院人文学部研究科院生

3、特別会員 山口大学文学部文学科旧教官、人文学部教官及び旧教官

(会費)

第五条 本会の経費は、会費、寄付金、その他の収入をもって当てる。正会員は終身会費一〇、〇〇〇円を納入する。準会員は入学時において上記の終身会費を納入する。

第六条 本会は次の役員をおく。任期は四年とし、再任は妨げない。

- 1、会長 一名
- 2、副会長 二名
- 3、委員 若干名
- 4、監事 二名

第七条 役員は次の職務を行う。

- 1、会長は本会を代表して会務を総括し、副会長は会長を補佐する。
- 2、会長、副会長及び委員は委員会を組織し、会務を処理する。
- 3、監事は会務及び会計の執行を監査する。

第八条 委員会は名誉会長に人文学部長を、顧問に人文学部経験者(本会正会員)ならびに会長経験者を、また会務運営のために幹事若干名を委嘱することができる。

第九条 総会は四年ごとに開催し、次の事項を審議して出席者の過半数をもって議決する。

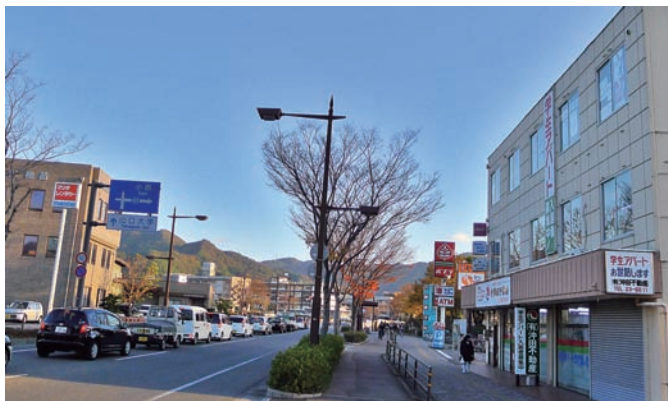
- 1、事業の報告
- 2、会計報告
- 3、役員を選出
- 4、会則の改正及びその他の重要事項

第十条 会員は本会の事業を推進するため、必要に応じ支部を設けることができる。

附則 この会則は昭和六〇年一月二日より改正施行する。

この会則は平成九年八月三日より改正施行する。

(昭和五六年一〇年三日制定)



大学通り。本会事務所は右手ビル2階

鴻文会役員 平二・八/平三・八

名誉会長

湯川 洋司(人文学部長)

会長

岡光 一浩(文理第一四回卒・ドイツ文学)

副会長

北川 健(文理第八回卒・国史学)
宮藤 隆夫(文理第一五回卒・社会学)

顧問

和田 敏英(文理第一回卒・英米文学)
大塚 博久(文理第四回卒・中国哲学)
大野 光生(文理第四回卒・中国哲学)
田中 晋(文理第一四回卒・英米文学)
添田建治郎(文理第一七回卒・国文学)

委員

赤梨 和則(文理第一五回卒・西洋哲学)
兼清 仁志(文理第二五回卒・中国哲学)
原口 公康(文理第七回卒・日本思想史学)
浅川 均(文理第四回卒・国史学)
山本 達夫(文理第四回卒・西洋史学/人文院第一回修了)
齋藤 禎(文理第五回卒・東洋史学/人文院第二回修了)
村岡 睦子(文理第三回卒・社会心理学)
大谷 泰子(文理第二〇回卒・社会情報論)
正分 あゆみ(文理第二三回卒・博物文化論/人文院第二〇回修了)
青島 啓(文理第一七回卒・博物文化論)
磯部 佳宏(文理第一回修了)
岡屋 真理(文理第三回卒・日本語文化論)
高田 知恵(文理第二〇回卒・中国語文化論)
中村 匡宏(文理第一回卒・英米語文化論/人文院第一三回修了)



人文学部正面玄関付近

池田 容子(文理第一回卒・英米語文化論/人文院第一五回修了)
岡村 賢司(文理第一四回卒・ドイツ語学・ドイツ文学/平一〇年院修了)
浅野 靖(文理第一回卒・フランス語学・フランス文学) 中村稚恵利(人文第二〇回卒・言語情報論)

監事

村田 博(文理第一五回卒・社会学)
渡邊 早苗(文理第三回卒・西洋史学)

学内委員

本田 義昭(文理第二〇回卒・ドイツ語学・ドイツ文学)
根ヶ山 徹(文理第四回卒・中国語学・中国文学)
磯部 佳宏(人文院第一回修了)
村田 裕一(文理第一〇回卒・考古学)
村岡 睦子(文理第二三回卒・社会心理学)

鴻文会ホームページの紹介

前号でもご紹介しておりますが、鴻文会ではホームページを作成して情報発信を行っております。公開は平成14年ですが、平成19年にバージョンアップしてからは、年数回のペースで定期的に更新しております。現在、コンテンツはそれほど多くはありませんが、会長挨拶・役員名簿などを掲載しております。

着情報としては、鴻文会関連・人文学部関連・各研究室同窓会などのコンテンツを準備しております。その他にも、会報「鴻文」バックナンバーのPDFファイルをダウンロードすることが出来るページもあります。コンテンツの一部を紹介すると、新着情報>鴻文会関連> [お知らせ] のコーナーに、人文学部30周年を祈念して、鴻文会から人文学部へ記念品として寄贈した外灯について、紹介文と写真を掲載しております。人文学部小講義室東側の一角に備え付けられ、夜間の保安と利便性の向上に役立っているようです。このように、ちょっとした出来事を紹介していくことで、会員の皆様に、鴻文会の活動を少しでも身近に感じていただけたらと考えております。今年前半までは、掲示板も運営しておりましたが、残念ながら、近年は利用者がほとんどいない状態が続いたために、役員会において、掲示板は平成22年6月末を以て廃止することが決定されました。現在は削除しております。

今後はコンテンツを少しずつ充実していきたいと考えております。手始めとして、ダウンロードできる会報バックナンバーの増補を計画中です。また、会員のみなさんから情報をいただいたり、あるいはご要望にお応えしたりといった形でも、拡充していければと存じます。是非とも一度ご覧いただき、ご意見やアイデアをお寄せ下さい。何卒ご協力のほどお願い申し上げます。

URL: <http://homepage3.nifty.com/koubun/index.html>

(鴻文会ホームページ担当)



p11の同期会報告の集合写真

編集後記

今年の夏は本当に厳しい暑さでした。その過酷とも言える暑熱がいつこうに冷めやらぬ九月三日、この会報の編集会議がスタートしました。それから三ヶ月以上過ぎた二月下旬、昨年どおり、会報「鴻文」をお届けいたします。今回もまた、編集を下記の女性役員四人にお預かり、副会長の北川・宮藤両氏と私がそれに加わり、事務の小野さんの協力を得て編集作業に当たりました。今号も多くの寄稿をいただきましたことを心よりお礼申し上げます。とりわけ、会報三〇号という節目に大先輩の和田・八木両氏から懐かしい心のこもった玉稿をいただきましたことはなにより喜びです。ご覧のように今号では、思い出のアルトハイデルベルクの地・山口や山口大学の写真を多く取り入れ、過ぎ去った短い美しい青春の綾なす会報に努めました。時は移り、世の中は変わっても変わらぬものがあることを想起していただければと存じます。来年二〇一一年は、昭和五六年一〇月に鴻文会が発足して三〇年目を迎えます。会報においても、会員の皆さまに支えられた三〇年を振り返る企画ができればと考えておりますので、皆さまからの良きアイデアをいただきたいものです。今年も有難うございました。来年も引き続きよろしくお願いいたします。(岡光一浩)

皆様より一足、二足早く会報を拝見させていただける役得も二年目となりました。私にとっでは、今の季節ですと、小春日和ののどかな昼下がりのようで、日常の変わらぬ日々をほのほの暖めてくれました。皆様にもそんな暖かさが伝わればいいなと思っています。(渡邊早苗)

昨年に引き続き、今年も会報作りに参加させていただきました。同窓会に関わる皆さまのさまざまな知識や経験等に接することによって、私自身も刺激を受け、成長させていただきました。私自身も刺激を受け、成長させていただきました。今後ともご指導いただきますようお願い申し上げます。(村岡睦子)

鴻文会などにかかわっている中で時々大学に行きます。おかげで今年も構内のきれいな紅葉を見ることができました。感謝です。(大谷泰子)

編集作業の際には、関係者の方々のご親切に常に浴しております。また、それぞれの記事の執筆者から届けられた、出来立てほやほやの原稿を読むという喜びも存分に味わうことができました。会報をお読み下さる皆様にも、何らかの喜び・楽しみをお届けすることが出来れば幸いです。(池田容子)



同窓会事務所での会報作成の打合せ風景です。月曜日から金曜日の午後一時から五時まで、事務の小野さんが勤務しております。山口大学付近にお越しになることがあります。是非お立ち寄り下さい。

最後になりましたが、会員の皆様のご健勝と一層のご発展をお祈り申し上げます。

